

④ (南伝七・一三二―一三四)

⑤ (南伝七・六八)

⑥ 大般涅槃經に釈尊自らの言葉として「阿難よ、我れに依りて説かれ、教えられた法と律とは、我が滅後に汝等の師なり」(南伝七・一四二)

⑦ 釈尊が王舎城の竹林精舎に住んでいられた時のある日、陶工の家で病床にあつたバツカリ―比丘を慰問された。バツカリ―は病床に臥しながら、「大德よ、すでに久しく世尊を見たてまつるために参詣したく願つていましたが、もはや私の体には、世尊を見たてまつるべく参詣するほどの力もなくなつてしまいました」と訴つた。釈尊は「ああバツカリ―よこのような朽ち行く肉体を見ても何んにもならないぞ。バツカリ―よ、法を見るものは我れを見る。我れを見るものは法を見る。バツカリ―よ、法を見て我を見る我れを見て法を見る」と教誡せられた。

(南伝二二・八七) (雜阿含四七・二五・增阿含二六・一はこの語を欠く)。

⑧ 宇井伯寿博士訳「阿育王刻文」(南伝六五・二二)

⑨

⑨ 異部宗輪論述記(中一七)

⑩ 「緣起法者非我所作、亦非餘人作・然彼如来出世及

未出世法界常住」とあり、「増一阿含」序品には「於法当念故・如来由是生・法興成正覚」とある。

涅槃經に於ける仏性説について

土井成忍

大乘の涅槃經はやはり臨終の説法とはなつてゐるが、仏入滅前後の事實を記述するのを目的とするのでなく、法身常住を説いて、仏には本より生もなく滅もない其生滅の相を現ずるのは畢竟衆生利益の爲であつて唯其色身であると言う高妙な教義を述べてゐる。所謂仏性を論じた法身常住經である。

そこで涅槃經に高くかけられた一切衆生悉有仏性は、法身常住、無有変易と結びつけて考えていることで仏に関する法身思想と離るべからざるものである。

元來仏性なるものは仏陀の説かれないことであるが、然し仏陀の教は決して一部の人々へのみ妥当し得るものでなくして、実に普遍的な一乗道であつた。如何なる人々と雖ども仏の教に信順して修行するものは、悉く仏の大覺に到達し得べき筈である。此の意味に於て仏陀が一切衆生に仏性を認められたと言つても決して誤りないものである。

ではこの涅槃經に「仏性」がどの様な形でべられているか。先ず所説の内容を組織的に解明することによつて、何故に涅槃經に仏性を説くかの思想的モメントを究明したいと思う、

仏性説はこの經典中特にポリウムのある如来性品、師子吼菩薩品に現れており、各方面から仏性を説いているので簡単に述べる事が出来ない。しかし、その所説を大別するならば、次の六つのグループに分けて考察す

ることが出来よう。即ち、才一に常と仏性について、才二、我と仏性について。才三、空と仏性について。才四、持戒解脱と仏性について。才五、仏性の二種因。才六、慈悲と仏性の六つである。

先ず才一の常と仏性については經の卷才十四に「仏性即是如来。如来即是法。法即是常」(大正十二・四四五・下)とのべ又、仏性は虚空の如しとして卷才二十八には、「若諸衆生内有仏性者。一切衆生应有仏身如我今也。衆生仏性不破不壞不牽不捉不繫不縛。如衆生中所有虚空。若使衆生無虚空者。則無去來行住坐臥不生不長」(同五三一・中)とのべ又仏性常一無變を唱えている。これは仏性が永久不生の「常」と永久不滅の「恒」を有する永遠なる法であることをのべているのであつて、涅槃經がこの常恒の意味を現わさんとして幾度も「本有今無・本無今有三世有法無有是処」をのべている。これは本有を以て永久不生も現わし、今有を以て永久不滅をとき、而して過於三世に依りて常恒が時間を超越することを顕わさんとするものである。

次に才二の我と仏性については、卷才七に「我者即是如来藏義。一切衆生悉有仏性。即是我義。如是我義從本已來常為無量煩惱所覆。是故衆生不能得見。」（同・四〇七・中）とか又同卷に「世間之人亦說有我。仏法之中亦說有我。世間之人雖說有我無有仏性。是則名為於無我中而生我想。是名顛倒。仏法有我即是仏性。」（同・四〇七・上）と説いている。

これは所謂無我的説は対機便宜の説法であつて、仏は決して眞実我を否定するものではないことを説示している。勿論仏の否定した我とは凡夫所執の我、即ち我執の我であつて、決して宇宙の本体とか、心の眞体とか言う我ではない。消極的説明の方面よりも寧ろ積極的説明の方面を力説しているのである。

才三空と仏性については、卷才二十七に「仏性者。即是一切諸仏阿耨多羅三藐三菩提中道種子。」（同・五二三下）と説き、更に又同卷には「若有人見十二因縁者即是見法。見法者即是見仏。仏者即是仏性。」（同・五二

四・上・中）とのべて、「十二因縁を仏性となす」とも、「中道才一義空の種子」とも名づけ、すべて空觀の一線にあるものであり、真空妙有、不二中道義の基盤の上にあるものである。

般若諸經では空を以て才一義諦となし、即ち法性智慧涅槃となすが、涅槃經も又全く同じである。

才四持戒解脱と仏性については、卷才七に「一切衆生雖有仏性。要因持戒然後乃見。因見仏性得阿耨多羅三藐三菩提。」（同・四〇五・上）とのべ更に同卷に「若有説言仏説中道一切衆生悉有仏性煩惱覆故不知不見是故应当勤修方便壞煩惱。」（同・四〇五・中）等と説いて、仏性は持戒に因つて見られる。性は修を持ち、修は性によつて意義づけられている。そうして涅槃經の本筋である護持世法・利他の大慈悲心にもとづく菩薩の持戒である大乘戒を強調している。

このことは大乘戒の裏づけとして、仏性説を述べるものであるとみられる反面、仏性説の実践的展開を菩薩道としての持戒に求めているのである。

才五仏性の二種因については、卷才二十八に「我說二

因正縁因。正因者名為仏性。縁因者発菩提心。以二因縁得阿耨多羅三藐三菩提。如石出金。」（同・五三三・中）とのべ、つゞいて「仏性者復有二種。一者は色。二者非色。色者謂仏菩薩。非色者一切衆生。」（同上）とのべている。

斯の如く仏性の二因を明すことは涅槃經に於て、一切衆生悉有仏性を高唱し、人を凡て其の絶対価値に於て見、人格の尊嚴權威を明らかにすると共に、それが同時に仏道修行の根柢となり基体となる仏性義の仏教的展開がなされているのである。

才六慈悲と仏性については、經の卷才十五に「慈者即是衆生仏性。如是仏性久為煩惱之所覆蔽故。令衆生不得親見。仏性即慈慈即如来。」（同・四五六・中下）と説き、卷才三十二には、「大慈大悲名為仏性。何以故。大慈大悲常隨菩薩如影隨形。一切衆生必定當得大慈大悲。是故説言一切衆生悉有仏性。」（同・五五六・下）等と、是如く積極的に慈悲喜捨が仏であるとのべ、福德智慧兩

者の欠くべからざることを説いている。

以上かかげた引用文によつても分る如く、「衆生が悉く仏性を有す」とか、「仏性とは是れ一切諸仏阿耨多羅三藐三菩提中道の種子である」とか云う內在論的な仏性のみでなく、又「仏性は内に非ず外に非ず」と言つて仏性を一切法に通じて明かし、その超越的な普遍性をも強調しているのである。

悉有仏性といへば衆生の内部に仏性なるものが存することを言うのである為に如何にも、衆生の方が分量上大で、仏性は小なるものかの如く理解され易いが、実は仏性は固然たる実体であるというものでないから小であるとは考えられない。超越的普遍性を有する仏性は法身で絶対無限であり、衆生の全体すら比較にならない。法身に包摂せられて衆生と現れているのが實際で、衆生は法身の中の靈動であるに過ぎない。法身に包まれてのみ存する所を悉有仏性と解し易く表現したのである。この意味において、衆生は煩惱を除滅することによつて、その性（菩提・如来）を顕現することを、ことさらに強調し

ているのである。

そこで支那の学者は「經」に菩提心を仏性に非ずとするのに対して、この正因も縁因も共に仏性と名づけ、前者を理性とし、後者を行性とし、二性具するものが初めて成仏可能であるとなすのである。

ここで理仏性としては誰も法性の理を本体とするから一切衆生皆具仏性といい、行仏性としては仏性を具すると具せざるとあつて、不具者は永不成仏と説く。かくの如く教理から更らに派生して來たのが即ち、大乘涅槃に於て最も特色ある教義の一つである闡提成仏の説である。

一闡提思想が「大涅槃經」に來つて非常に問題にされたのは、必ず之を誘発すべき事情のあつた事を想わしめる。それは大乘非仏説論の抬頭である。

そうして經の中には成仏の機をのべる所に於ては常に一闡提を除外している。だがしかし一切衆生悉く仏性を有すとせば闡提に於てのみ之を欠くとは許されないことである。

彼の法頭本と無識本とでは、その内容に大きな相異が

見られる。即ち、法頭本にも一切衆生悉く有仏性の説は唱えているが一闡提だけは之を除外し、秋毫菩提の因を有せざるものなし。としているが、無識本にあつては悉く有仏性の説から当然の帰結である闡提も亦成仏し得ることに重きをおいている。

ところで一闡提思想そのものより「大般涅槃經」を見直すならば、本經は三段に分けられる。「經」の初めと終りの間には大なる相違があつて、經の前半に於ける一闡提の不成仏到底治し難いとせられるが、それはあくまでも惡を制し、罪を憎む道德的立場である。

後半に於ける一闡提成仏はすでに犯してしまつた惡や罪に対しては止むを得ずこれを許し哀れむ宗教的立場である。

元來人心は動的であつて、決して固定しているものではない。嘗て闡提であつたものが、常に闡提の地位に止まらなければならぬ理由はない。だから闡提が闡提である間は仮令ひ仏たる素質があるとしても、到底仏たることを得ない。是れが即ち闡提不成仏説の由つて起る所以

である。

既に一切衆生に仏たる素質の備わることを許す以上は内外幾多の因縁に由つて、不信者が信者となる事は当然有り得ることである。

これを闡提成仏という。此の間には時間の觀念を容れることを要するので、始めは闡提であつたが後に非闡提となり成仏するという意義であり闡提其者が成仏すると言うのではない。何れも宗教的道德修養によつて同一解脱に達し得るとなし、人間的自覺の上に立つて万人の成仏を認めたのである。人間性喪失の危機が叫ばれている現代の精神文化において、正しく見直されなくてはならない不朽の真理である。